

第VI部

「ある」と「いる」

第18章では、

「ある」が「存在」を表し、
「いる」が「内在システムの発現した結果としての存在」を表す
ことを述べる。

「内在システムの発現」という視点から探ってみた結果、「ある・いる」の違い、「～てある・～ている」の違いを統一的にとらえることができるようになった。

第18章

「ある」と「いる」

18.1 存在の二様態 「ある」と「～てある」，「いる」と「～ている」

日本語では、存在者の存在を二様に表現し分ける。

- 1) 単に「存在」するものとして
- 2) 何らかの「出来事と関連して存在」するものとして

日本語はこの二つの存在の表現のしかたを区別する。

1)の場合は「ある」ないし「いる」の形で表現し、2)の場合は「～てある」ないし「～ている」の形で表現する(13.1)。

本章においては、1), 2)の両方の場合を通じて、統一的に
「ある」は「存在」を表し、
「いる」は「内在システムの発現した結果としての存在」を表す
ことを述べる。(「内在システム」とは「内在体系/組織/秩序」といえる。)

18.2 存在（「ある」と「いる」）

1) 存在「ある」

日本語ではすべての存在者の存在は基本的に「ある」で表現できる。岩波国語辞典等を参考に、次のような用例を挙げることができる。構造図もいくつか掲げておく。

光がある／神はある(図18-1)／地震がある／傷あとがある／
横浜は東京の南にある／半年前までここにあった／
明日は試験がある／二度ある事は三度ある／彼には才能がある／
甘みのある食品／病気になることもある

人間や動物についても「ある」が使える。

彼には子が三人ある / 賛成の人もある / 脚の短い犬もある /

昔昔、欲張りじいさんがありました / ありし日の面影 /

わが思ふ人はありや無しやと(古今) / ひよこ, あります

次のものも関係がある。

吾輩(わがはい)は猫である (=猫として存在する, 図18-2)



図18-1 神(は)ある



図18-2 吾輩(は)猫である

2) 存在「いる」

ところが、現代日本語では、その存在を、その存在者のもつ内在システムの発現した結果であるととらえる場合には「いる」で表現するようになっている。

人間や動物の存在は、その存在の持つ内在システムである「存在の位置を選択するシステム」の発現の結果ととらえられることが多いので「いる」で表すことが多い。無生物でも、「存在の位置を選択するシステム」を内部に持ち、そのシステムの発現の結果としてそこに存在するととらえられる場合には「いる」で表す。

やはり岩波国語辞典等を参考に、次のような用例を挙げることができる。

私は京都にいる(図18-3) / 犬がいるよ /

親が(ここに)いたらこんなことにならない /

あそこにいるバスに乗る / 彼にはいとこが8人いる

そして、次のような表現も関係がある。

彼は学生でいる(図18-4)

図18-3 私(は)京都にいる図18-4 彼(は)学生でいる

特にこの図18-3, -4に示されている例のように、「存在の位置(図18-3では空間的位置、図18-4では社会的位置)を選択するシステム」の発現した結果としての存在を表すような場合、「いる」には存在の位置を存在者がそのつど決定しているエネルギーが感じられる場合が多い。「ある」にはそのようなニュアンスはない。「彼は学生でいる」と「彼は学生である」、「魚がいる」と「魚がある」をそれぞれ比較するとそれがよくわかる。

以上のように、ある存在者が内在システムの発現の結果存在しているととらえられる場合には、その存在は「いる」で表現される。そのようなとらえ方をしない場合には、その存在は「ある」で表現される。

18.3 出来事と関連しての存在（「～てある」と「～ている」）

1) 扇風機も回り始めれば「～ている」

ここに扇風機があるものとしよう。この扇風機を単にここに存在するだけのものとしてとらえる場合には「ある」でしか表現できない。

*扇風機がいる

とは言えない。扇風機には存在の位置を選択するシステムがなく、その発現のしようがないからである。

ところが、この扇風機が回り始めたらどうだろう。

扇風機が回っている

というふうに「いる」が使えるようになる。

これはどう考えればよいのだろう。

ここでは扇風機は回る出来事と関連づけられた存在になっている。出来事の実現と関連づけられた存在者の存在は、動詞をテ形にして、「～てある」

あるいは「～ている」の形で表現される(13. 1)。それで、この扇風機の存在は、

回ってある / 回っている

のどちらかで表現されることになる。

「～ある」と「～ている」を区別するものは、その出来事(回る)が、その存在主体(主語・扇風機)の持つ内在システムの発現したものであるかどうかという点である。内在システムの発現した結果としてとらえられる出来事であるならば「～いる」(18. 3 2))が用いられ、そうでなければ「～ある」(18. 3 3))が用いられる*1。

扇風機には「回るシステム」が内在しているととらえられるので、この扇風機には「～いる」が用いされることになる。

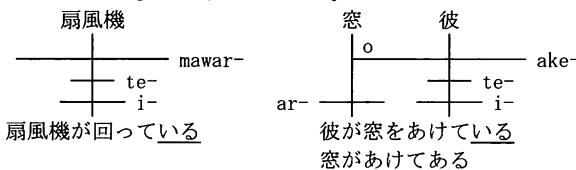
扇風機が回っている

つまり、扇風機は回り始めた瞬間に、単に存在するだけの存在者であることをやめ、「回る」という出来事と関連した存在者となり、しかも「自らに内在する回るシステム」の発現した結果としての存在者となる。このため「回っている」という表現をとることになるのである。

(単なる存在)	(内在システムの発現と関連した存在)
扇風機が <u>ある</u>	扇風機が回 <u>っている</u>

図18-5

*1 構造形式の上から言えば、「その存在主体(ar-ないし-i-)を持つ実体)がその動属性を主体としてもっているときに『～いる』が用いられ、そうでないときに『～ある』が用いられる」ということになる。



2) 「～ている」

内在システムの発現の例をいくつか挙げてみる。

彼が字を書いている (彼に内在する「書く」システムの発現・図18-6)

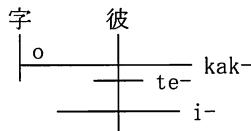
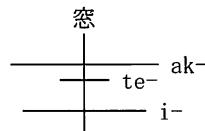
彼が車に乗っている (彼に内在する「乗る」システムの発現)

窓があいている (窓に内在する「あく」システムの発現・図18-7)

手紙が届いている (手紙に内在する「届く」システムの発現)

針が落ちている (針に内在する「落ちる」システムの発現)

料理が出来ている (料理に内在する「出来る」システムの発現)

図18-6 彼が字を書いている図18-7 窓があいている

これらの例においては「存在」する主語にとってその出来事が内在システムの発現となっている。それでその存在は i-(いる)で示されるのである。

(「本が届く」のような場合、「本」にとっての「届く」は、「手紙」と異なり、本来的な内在システムではなく、可能的内在システムである。)

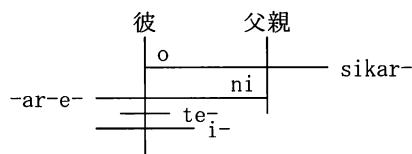
以上のタイプとは別に、次のようなタイプの内在システム発現の例もある。

彼はしかられ(sikar-ar-e-)でいる

(彼に内在する受身 -ar- のシステムの発現・図18-8)

富士山が見え(mi-e-)でいる

(富士山に内在する許容 -e- のシステムの発現・図18-9)

図18-8 彼がしかられている

-ar-e- は「受動基A」(12.5 2))

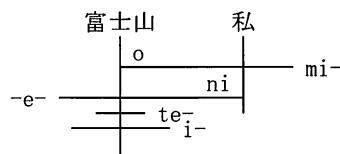
図18-9 富士山が見えている

図18-8,-9のタイプの構造では、出来事の主体が2つあるように見える。図18-8では能動主体(父親)と受動主体(彼)があり、図18-9では能動主体(私)と許容主体(富士山)がある。しかし、図18-8での出来事は「しかる」ではなく、あくまでも「しかられる」であり、図18-9での出来事は「見る」ではなく、あくまでも「見える」である。それで、両図の出来事の主体は能動主体ではない方であるといえる。図18-8では受動主体の「彼」が、図18-9では許容主体の「富士山」が主語になって、その主語の存在が示されている。その存在する主語にとって、その出来事は内在システムの発現となっているので、その存在は *i-(いる)* で示されるのである。

ところで、もちろん内在システム(や可能的内在システム)にないことは発現しないので、次のような場合には「～ている」は使用できない。

*窓があけている (窓には「あける」というシステムがない。図18-10)

*手紙が届けている (手紙には「届ける」というシステムがない。)

*針が落としている (針には「落とす」というシステムがない。図18-11)

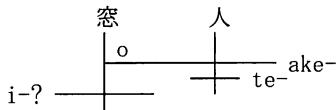


図18-10 窓が開けて *i-?*

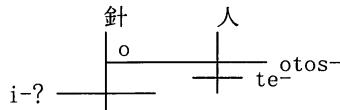


図18-11 針が落として *i-?*

図18-10,-11の構造においては、「窓」、「針」の存在を示そうとしているのであるが、両者とも出来事(「あける」「落とす」)がその両者の内在システムの発現になっていない。それで、ここで *i-(いる)* を使おうとしても無理なことなのである(18-3 3) 参照)。

次に、アスペクトの観点から考えてみる。この「～ている」は出来事開始後のすべての局面のあり方を表すことができる。たとえば着物を「着ている」は次のように、着始めたあと、その出来事についての記憶がなくなるまでのすべての存在のあり方を表現することができる(第13章参照)。

いま着物を着ている（「着る」行為を進行中の存在）

今日は着物を着ている（「着る」行為の結果の状態を継続中の存在）

先週は着物を着ている（「着る」行為・結果状態の記憶中での存在）

この3つの存在のあり方を図示すれば、図18-12のようになる。

(着る出来事)		(脱ぐ)	(忘却)
いる	着て <u>いる</u>	着て <u>いる</u>	着て <u>いる</u>
(進行局面)		(結果局面<状態>)	
			(結果局面<記憶>)

図18-12

3) 「～てある」

日本語には元来本章で扱っている「～ている」という表現がなく、出来事の実現が内在システムの発現したものであるかどうかという視点はなかった。出来事と関連した存在はすべて「～てある」(～たる)で表現できた*1。

紫だちたる雲の細くたなびきたる（枕草子・春はあけぼの）

この例では、「紫だつ」「たなびく」は「雲」の内在システムの発現であると考えられるので、現代日本語なら、

紫だっている雲が細くたなびいている

となるはずである(次ページ脚注1参照)。

現代語では出来事を内在システムの発現とみる場合に「～ている」を使用するようになっているので、「～てある」を使用するのは、主として次の2つの場合になった。

その出来事が存在者の

*1 出来事の実現と関連した存在がすべて「～てある」(～たる)で表現できたところから、その縮約形の「～た」が出来事の完了を表すようになった。

$$\begin{array}{l} =te-\emptyset=ar- \rightarrow =t-\emptyset=ar- \rightarrow =t-\emptyset=a-\emptyset \\ (\text{である}) \qquad \qquad (\text{たる}) \qquad \qquad (\text{た}) \end{array}$$

花

sak- (咲く)	sak-i=t-∅=ar- (咲きたる)
	sak-i=t-∅=a- (咲いた) ○

sak-

t-

a-

① 内在システムの発現でない場合

② 内在システムの発現であっても「準備完了」を表現する場合

この2つである。

この両者について、例を挙げて検討してみる。

① その出来事が存在者の内在システムの発現でない場合は「～てある」

これは「～てある」で表現する第1の場合である。

字が書いてある (「書く」は字の内在システムではない。)

ドアがあけてある (「あける」はドアの内在システムではない。)

料理が作ってある (「作る」は料理の内在システムではない。)

本が並べてある (「並べる」は本の内在システムではない。)

上例「字が書いてある」の場合、書いたのはたとえば「彼」であり、「字」が書いたわけではない。構造は図18-13のとおりである。

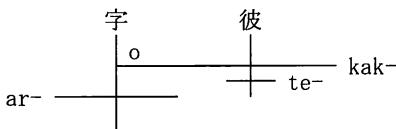
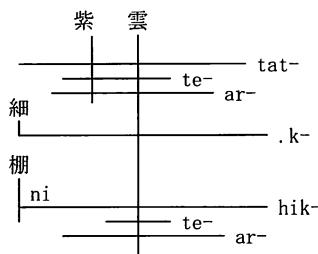


図18-13 字が書いてある

*1 前ページの「紫だちたる雲の細くたなびきたる」の構造を示せばこのようになる。



現代語であれば、この ar- は i- になる。（「の」に関する構造は省略してある。）「紫だちたる」の部分は、主体「雲」が「紫がたつ」という単位構造を属性としてもっていることを意味している(19.2.3)。

出来事(書く)の主体(彼)は文の主語(字)とは別の存在者であり、この別の存在者(彼)の内在システム(書くシステム)の発現があったわけである。この構造では、文の主語(字)が、他者(彼)の主宰する出来事(書く)に参加させられた形になっている。

また、アスペクト的には、「～てある」は出来事完了後のあり方のみを表し、特に「結果局面<状態>」を表す(図18-14)。これは「～ている」が出来事の進行中をも表すことができると対照的である。「～てある」は「～ている」よりアスペクト的に限定度が高い。

(着る出来事)			(脱ぐ)	(忘却)
アル・イル	着ている	着ている	着ている	
(進行局面)	(結果局面<状態>)		(結果局面<記憶>)	
アル・イル		書いてある		(書いてある)
(書く出来事)			(消す)	(忘却)

図18-14

「～てある」は出来事完了後ののみの存在を表すことから、限定度が高く、「準備ができている」というニュアンスを伴うことが多い。

以上から、こう言うことができる……「～てある」は出来事の主宰者(彼)がある意図で実行した出来事(字を書く)の完了後を表し、その出来事の対象となった実体(字)を主語とする。出来事(字を書く)完了後の主語(字)の存在を表す。

② 内在システムの発現ではあっても「準備完了」を表現する場合は 「～てある」

これは「～てある」で表現するもう一つの場合である。次のような例では、当然「～ている」が使えるのであるが、あえて「～てある」を使っている。(このとき、「～てある」の主体は有情物になっている。)

彼は予習をしてある（「予習をする」は彼の内在システム 図18-15）

彼は薬を飲んである（「飲む」は彼の内在システム）

彼は車を待たせ(mat-as-e-)てある

（使役基 -as-e- は彼の内在システム 図18-16）

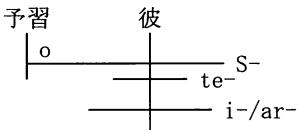


図18-15 彼は予習をしてある

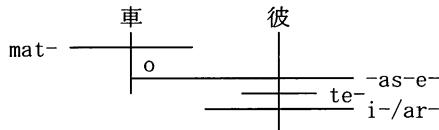


図18-16 彼は車を待たせてある

-as-e- は使役基(12.5 1) 参照)

「～でいる」を使用せずに、あえて「～である」を使用しているのは「～である」の「準備ができている」というニュアンス(①参照)を利用するためである。「～でいる」では表現できる存在のあり方が拡大してしまう(図18-14)ため、なかなか一つの意味に限定できない。そこでこのように、内在システムの発現ではあっても、「～である」で表現するのである。

内在システムの発現ではあっても「～である」が使用できるのは、「～である」が元来出来事に関連したすべての存在に適用されるものであったからである(18.3 3)冒頭部)。

なお、図18-15, -16の構造では、①から「彼」ばかりでなく「予習」や「車」も ar- を属性として持ち、二重主体となることが可能である(図18-17, -18)。その場合には、「彼が予習がしてある」「彼の車が車が待たせてある」のように複主語として描写することが可能となる。

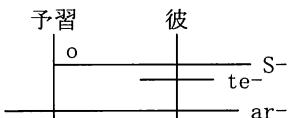


図18-17 彼が予習がしてある

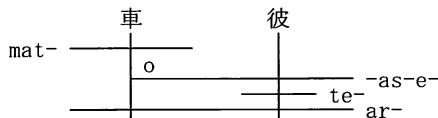


図18-18 彼が車が待たせてある

18.4 「内在システムの発現」という視点

以上、「ある」と「いる」の違い、「～てある」と「～ている」の違いを「内在システムの発現」という視点から探ってみた。その結果、従来切り離して考えられていた「ある・いる」と「てある・ている」を統一的にとらえることができるようになった。

従来の視点は、生物・無生物の区別に置かれる傾向があった。たしかに、「ある」と「いる」の違いはそれでも何とか説明はできた。ところが、「窓が閉まっている」のような例で、なぜ無生物の「窓」が「いる」を取るのかまでは説明できなかった。せいぜい、「～ている」という形になることによって「いる」の実質的な意味が失われたからである、と言うしかなかった。

また、「～てある・～ている」を行為の結果としての状態を表す場合に限定して、「～てある」が他動詞とともに、「～ている」が自動詞とともに使用される、という説明法があった。たしかに、限定された限りではそれでもよかったです。しかし、それは他動詞が「店を開いている」のように「～ている」で用いられ、また、自動詞が「もう十分泣いてある」のように「～てある」で用いられて、やはり行為の結果としての状態を表すことがあるという事実を切り捨ててのことなのであった。動詞の自他による説明では不十分なのである。

限定的な、部分的な説明は語学教育の方便としては意味がある。しかし、それらの部分部分の背後にあるものを統一的にとらえて説明することができればそれにこしたことはない。「内在システムの発現」という視点がそれを実現してくれたように思うのだが、いかがであろうか。